

伝アリストテレス作『大道徳学』翻訳補遺

新島，龍美

九州大学大学院比較社会文化研究院文化空間部門文化動態講座：准教授

<https://doi.org/10.15017/1669308>

出版情報：地球社会統合科学．23（1），pp.1-10，2016-07-25．九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：



論文

伝アリストテレス作『大道德学』翻訳補遺

A Supplement to a Japanese Translation of the supposedly Aristotelian *Magna Moralia*

2016年5月12日提出, 2016年6月2日受理

新 島 龍 美*

Tatsumi NIIJIMA

キーワード: アリストテレス、『大道德学』(*Magna Moralia*)、新版アリストテレス全集、写本情報

要旨

本稿は、アリストテレス作と伝えられる『大道德学』(*Magna Moralia*) の新しい日本語訳への補遺で、底本として採用された Susemihl 校訂の Teubner 版と異なるテキスト上の読みを採用した場合の、写本等の裏付け資料である。

* 大学院比較社会文化研究院・文化空間部門・文化動態講座

筆者は、今春、岩波書店より刊行中の新版アリストテレス全集の一巻として、アリストテレス作と伝えられる『大道德学』(*Magna Moralia*) の新しい日本語訳を上梓した¹。翻訳にあたっては、F. Susemihl の校訂になる Teubner 版を底本としつつ、同版の読みとは異なるギリシア語の読み方を採用した場合には、その旨注記した。その際、当初は、採用された読み方を支持する写本情報を合わせ示していたが、校正途中で編集委員より注文が出され、誠に「不本意ながら (ἄκων)」、「やむなく (βίαι)」、写本情報は削除を「余儀なくされた (ἀναγκάζεσθαι)」。Teubner 版の異読欄 (apparatus criticus) の記載が正確で包括的なものであったならば、採用されたギリシア語の読み方の表記から写本上の根拠を推測することも可能であったであろうが、旧稿でも示したように²、Teubner 版の異読欄の記述は、正確さや完全さの点で不十分なものである。従って、底本とは異なる読み方を採用した場合の写本上の裏付けは、やはり、それとして何らかの仕方で明示的に指示しておくことが学問上必要となる。

本稿はこうした事情に鑑み、Teubner 版の読みとは異なるギリシア語テキストを採用した箇所の写本情報を記載して、上記の新しい日本語訳を補完し、後学の便宜に供することをめざすものである (写本情報以外にもやむを得ず省略したものも合わせて記載した)。

記載方法は、上記邦訳の訳者注のうち、写本 (等) への言及を含むものについて、巻毎・章毎に、写本情報 (等) の部分を明示した形で記載する (当該部分を太字体・下線付きで表示)。

『大道德学』のギリシア語写本のうち、訳者注で言及したものは以下の通りである。

C^c : Cantabrigensis (Cambridge University Library, li. 5. 44) . by Nicholas of Oria.

P^b : Vaticanus gr. 1342. End of the 13th century by Nicholas of Oria.

A : Ambrosianus B. 95 sup. c. 1300.

L : Laurentianus 81, 18. End of the twelfth century by <Ioannikios et al.>.

¹ 新島龍美、萩野弘之訳、『アリストテレス全集16 大道德学、エウデモス倫理学、徳と悪徳について』、岩波書店、2016

² 新島龍美、「伝アリストテレス作『大道德学』のテキスト研究 (I)」、『比較社会文化』第16号、2010年、pp. 51-64

K^b : Laurentianus 81, 11. End of the ninth century.
 B : Vaticanus Barb. 75, 13th century by Rainaldus of
 Kallipolis.
 V : Vindobonensis phil. 315. 11–12th century.
 Rav. : Ravenna 210. 1447 by Athanasios Chalceopulos.

その他の文献³

テキスト

Bekker, I. 1831. *Aristotelis Opera*, vol. II, Berlin.
 Erasmus, D. 1550. *Αριστοτέλους Ἀπαντα*, vol. II, Basel.
 (Bas.³と略記)
 Susemihl, F. 1883. *Aristotelis quae feruntur Magna Moralia*, Leipzig. (底本)
 Sylburg, F. 1584. *Αριστοτέλους τὰ εὐρισκόμενα*, vol. 10, Frankfurt.

近代以降の翻訳・注解

Armstrong, G. C. 1935. *Aristotle, Metaphysics Books X—XIV, Oeconomica, Magna Moralia* (Loeb Classical Library), Cambridge, Mass.
 Dirlmeier, F. 1966². *Aristoteles, Magna Moralia*, Berlin.
 Riekher, J. 1859. *Aristoteles, Große Ethik*, Stuttgart.
 茂手木元蔵 1967.『(アリストテレス) 大道德論——翻訳と研究——』、横浜市立大学

注で言及されるもの

Bergk, T. 1858. *Sophoclis Tragoediae*, Leipzig.
 Bonitz, H. 1844. *Observationes criticae in Aristotelis quae feruntur Magna Moralia et Ethica Eudemia*, Berlin.
 ———. 1859. “Zur Textkritik der Eudemischen Ethik und der Magna Moralia,” *Jahrbuch für classische Philologie*, vol. 5, pp.15–31.
 ———. 1870. *Index Aristotelicus*, Berlin.
 Breier, F. 1845. Review of H. Bonitz [1844], *Neue Jenaische Literatur-Zeitung*, 4, 843–846.
 Donini, P. L. 1965. *L'Etica dei Magna Moralia*, Torino.
 Jaeger, W. 1948. *Aristotle, Fundamentals of the History of his Development*, (trans. R. Robinson), 2nd ed., Oxford.
 Johnstone, H. M. 1997. *Prolegomena to A Critical Edition of The Aristotelian Magna Moralia*, Thesis submitted for the D. Phil. degree, Oxford University,

Hilary Term, 2 vols.

Spengel, L. 1841 & 1843. “Über die unter dem Namen des Aristoteles erhaltenen Ethischen Schriften,” *Abhandlungen der philosophisch-philologischen Classe der königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, III ix, pp.437–439; III x, pp. 499–551.

———. 1866. “Aristotelische Studien I,” *Abhandlungen der philosophisch-philologischen Classe der königlich Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, X, pp.127–167; “Aristotelische Studien II,” *ibid.* pp.593–671.

Wagner, D. 1973. “Zur Biographie des Nicasius Ellebodius (†1577) und zu seinen ‘Notae’ zu der aristotelischen Magna Moralia,” *Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, philosophisch-historische Klasse*, vo. 5. [= Ellebodius]

『大道德学』

第一卷

第一章⁴

- (1) 底本の $\eta\theta\kappa\omega\upsilon\nu$ は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) に従い $\eta\theta\omega\upsilon\nu$ と読む ……。
- (4) 「何の部分か」という問いは、以下の叙述が示す所では、どういう知識の部分かを問うものとして提起されていることになる。この点を勘案すれば、1181a25の $\tau\omicron\ \eta\theta\omicron\varsigma$ は「性格に関する考察」(「倫理学」) という程の意味で理解しなければならないであろう (cf. Bonitz, Index, 316b11; Dirlmeier, 155; Donini 1965, 7n. 10)。他方、 $\eta\theta\omicron\varsigma$ にそこまでの意味を読み込むことが無理だとすれば、 $\eta\theta\omicron\varsigma$ を (例えば) $\eta\theta\kappa\omicron\nu$ に修正する選択肢も考慮の対象となろう。……
- (7) 底本は1181a27で (何の指示もなしに) Bas.³ および Bekker 版の $\pi\omicron\iota\omicron\nu\ \tau\iota\nu\alpha$ を採り Armstrong もそれに倣っているが、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) に従い $\pi\omicron\iota\omicron\nu\ \tau\iota\nu\alpha$ と読む ……。
- (16) 1182a9の最初の $\epsilon\varsigma\tau\alpha\iota$ は、一部の写本 (C^c, P^b) に従い、削除する。
- (23) …… なお、Dirlmeier 166や Donini 9 note 13 に従い、1182a27の $\kappa\alpha\iota\ \sigma\upsilon\nu\nu\acute{\epsilon}\zeta\epsilon\upsilon\varsigma\epsilon\nu$ は削除しない。
- (30) Dirlmeier 170によれば、「この最初の二分法は、この形式では『大道德学』に特有のものであり、その対立は論理学的著作 (例えば、『分析論後書』

³ 本稿で言及されるものに限った。その他の文献については、拙訳の解説末尾の文献表を参照されたい。

⁴ 以下、括弧内数字は、『大道德学』の上記日本語訳への訳者注の番号である。

72a1、『トピカ』141b4--5)に由来し、端的な善とわれわれにとっての善の通常の区別と混同されてはならない。

- (40) 1182b28は(K^b写本に従う)底本のαὐτὴ(「それ自身が」)ではなく、幾つかの写本(C^c, A, L, B)に従い、αὕτη(「それが」)と読む。
- (42) 1182b33は諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, B)に従い、τῶν κατὰ μέροςと読む。
- (47) 1183a16のτῇは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)に従い、削除。
- (52) 底本は1183a27で(何の指示もなしに)A写本およびRav.のφανερώτεραを採っているが、他の写本(C^c, P^b, L, K^b, B)に従いφανερώταταと読む。
- (55) 1183a38のφησὶは幾つかの写本(A, L, K^b, B)に従い削除せず、1183a39のἐρεῖは、幾つかの写本(C^c, A, L, B)に従いἐρῶと読む。
- (57) 1183b5のεἶναι ἀθάνατονは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)に従い、ἀθάνατον εἶναιの語順で読む。

第二章

- (10) 1184a23のτοῦτοは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, B)のままτούτωνと読む。
- (14) この箇所(1184a28)は、①その考察方法についての検討がなされているのが他ならぬ「最高善 τὸ ἄριστον」、「最も善きもの τὸ βέλτιστον」、幸福(エウダイモニア)であること、および、②写本間の考量(βέλτιστον C^c, P^b, L, K^b; βέλτιον A, B)から、底本のβέλτιονではなく、幾つかの写本のβέλτιστονと読む……。
- (15) 1184a28のχωρὶς τούτωνは、一部写本(A, L)のχωρὶς τῶν ὑφ' ὧνと読む。
- (16) 1184a29のἄλλ'は、幾つかの写本(C^c, P^b, K^b)により、削除。
- (17) 1184a34のτῶνは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L, K^b)により、削除。

第三章

- (2) 1184b9の最初のτὸは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, K^b)によりτῶと読む。

第四章

- (17) 1185a30のἐκεῖνοは、幾つかの写本(C^c, P^b, K^b, B)のἐκεῖνονと読む。
- (18) 1185a34のοὐδὲνは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)のοὐδὲと読む。……

第五章

- (7) 1185b12のτῶ λόγον ἔχοντιは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, K^b)により、τῶ τὸν λόγον ἔχοντιと読む。
- (10) 1185b27のπάντεςは、Spengel, Armstrong, Johnstoneの提案に従いπάντοςと読む(pace Dirlmeier)。……

第八章

- (3) 1186a37のοἶον μοιχείαは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、οἶον ἢ μοιχείαと読む。

第九章

- (1) 1186b7のθρασύτης ὑπερβολὴ οὐσα(B)は、他の写本(C^c, P^b, A, L, K^b)に従い、ὑπερβολὴ θρασύτης οὐσαと読む。
- (4) 1186b14--15のἀνελευθέρους……ἀνελεύθεροιは、多くの写本に従い、ἀνελευθερίους……ἀνελευθερίοιの形で読む(ἀνελευθερίους: C^c, P^b, A, L, K^b, B; ἀνελευθερίοι: C^c, P^b, A, L, B)。
- (6) 1186b22は、幾つかの写本、Dirlmeier, Johnstoneに従い、底本の二つの冠詞(ἡ)とも削除(ἡ¹: om. C^c, P^b, A, L, K^b, B; ἡ²: om. A, L, K^b)。
- (10) 1187a3のἐμπεριέχονは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)に従い、μὲν περιέχονと読む。
- (17) Johnstoneに従い、1187a21は、写本系統を勘案して(C^c, P^b, A, L)、οὐκを削除し、ἀκουσίουςはέκουσίουςと読む。

第十一章

- (1) 1187b6のτῶνは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、削除する。
- (3) 幾つかの写本(C^c, P^b, L, K^b)および1187b6とb8の言語使用によって、b9のὁは削除する。
- (6) 1187b21のἐπ'は、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, B)の通り、ἐνと読む……。

第十二章

- (1) 1187b33の最初のτὸは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、削除する。
- (4) 1188a2のπράττομενは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, B)の通り、ποιούμενと読む。

第十三章

- (1) 1188a22-23のκατ' ἐπιθυμίανは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、κατὰ τὴν ἐπιθυμίανと読む。
- (2) 1188a31のεἰδῶς τὰ κακὰは、幾つかの写本(C^c,

P^b, A, L) により、τὰ κακὰ εἰδώςと読む。

第一七章

- (1) 1189a1のἔτι δὲは、幾つかの写本 (C^c, P^b, L) により、δὲを削除。
- (5) 1189a9のτὸは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、τὰと複数形で読む。
- (8) 1189a14のβέλτιονは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) により、βέλτιστονと読む。
- (10) 1189a15のβέλτιονは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, B²) により、βέλτιστονと読む。
- (15) 1189a27のαἰρετόνは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、αἰρετώτερονと読む。
- (18) 1189b2のἄν τι γὰρ προαιρώμεθαは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἄ γὰρ προαιρούμεθαと読む。
- (21) 1189b16-17は、先ず ὅποι' ἄν ... βελτίωの代わりに ὅποιον ... βελτίονと読み (C^c, P^b, A, L)、(小辞 ἄνを読まないことに即応して) 接続法のφαίνηταιは直説法のφαίνεται (L) と読み、さらに複数形が単数形に変わったことに応じて、複数形のταῦταを単数形のτοῦτοに修正する。また、b16のἐξを一部の写本 (C^c, P^b) により削除する。
- (24) 1189b23のἦは、一部の写本 (C^c, P^b) により、削除する。

第一八章

- (2) 1190a1のβουλευέσθαιは、一部の写本 (C^c, P^b) とEllebodiusの推測により、冠詞を付加してτὸ βουλευέσθαιと読む。
- (4) 1190a4のκατὰは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, K^b) により、πρὸςと読む。
- (11) 1190a20のἄρετήνの後のコロンはコンマに変え、γὰρは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) により削除し、ἐστίνの後のコンマはコロンに変える。また、1190a21のἕκαστονは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἕκαστον γὰρと読む。

第一九章

- (3) 1190a30のὅλως δὲ δὴは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ὅλως τε δὴと読む。
- (6) 1190a35のἡ τὴν ἐξιν τὴν αὐτήνは、一部の写本 (A, L) により、ἡ τὴν ἐξιν αὐτήνと読む。

- (7) 1190a35のοὐは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) により、ὦνと読む。

第二〇章

- (3) 1190b11のἀποβάλλη (現在接続法) は、幾つかの写本 (A, L, K^{b2}, B) によりἀποβάλη (アオリスト接続法) で読む。
- (5) 1190b20のἐν τούτοις ὁ ὦνは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ὁ ἐν τούτοις ὦνという語順で読む。
- (7) 1190b28のδὴは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, K^b) により、δὲと読む。
- (9) 1190b32のαὐτοὺςは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, K^b) により削除。
- (13) 1191a17-18のτὸν [ό] ποῖον οὖν ἀνδρεῖον は、一部の写本 (P^b, K^b) によりτὸν ὁποῖον οὖν ἀνδρεῖονと読む。
- (16) 1191a21のπαρῇは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, K^b) により削除する。.....

第二一章 (第二二章)⁵

- (3) なお、1191a38のτὰςは、一部の写本 (C^c, P^b) により、削除する。
- (5) 1191b10で始まった文章は、b14のπάρεργαまではb10のbe-動詞 (ἔσται) に支配され主語も補語も主格で表現されているが、b14のκαὶ αὐτόν γε τὸν以降構文が変わり対格形が登場するが、このb14-16の部分には主動詞と主語が登場せず、文章が完結していない。
- そこで、1191b16の末尾に空白 (lacuna) の報告があるのを利用して「何かを言う・呼ぶ」を意味する表現をそこに補うことが考えられる。諸家の提案としては、例えば、「と呼ぶべきである (χρηὶ καλεῖν)」(Spengel)、「と主張すべきである (φατέον)」(Bonitz, prob. Breier, Dirlmeier)、「われわれは言う、もしくは、われわれは呼ぶ (λέγομεν vel καλούμεν)」(Rieckher, prob. Armstrong)、「われわれは主張する (φαμεν)」(Ellebodius)「[われわれは] と呼ぶ」(茂手木1967, p.142) 等が挙げられる。或いは、b14の強意代名詞αὐτόνの必要性に疑念が感じられる点と連動させて、αὐτόνの代わりにφατέον (「と主張すべきである」) を読む提案 (Johnstone) —— φατέονは1190b13-1191a15で六回使われている——

⁵ 現在アリストテレス作品の箇所を指定するための基礎となっているベッカー版の章付けが第二一章を誤ってとばしている。以下、()内はベッカー版の章付けを表す。

や、φαμέν (「とわれわれは主張する」) を読む示唆 (Michael Frede) も出されている。……。

- (6) 1191b19のδοκιμάζονταは、幾つかの写本 (C^c, A, L, K^b, B) により、δοκιμάζοντεςと読む。

第二章 (第二章)

- (2) 1191b24のμὲνは、幾つかの写本 (C^c, P^b, L) により、削除しない。

第三章 (第二章)

- (4) 1192a3のτ'は、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) 通り δ'と読む。またその後のἀνελεύθεροςは、幾つかの写本 (P^{b2}, K^{b1}) により、ἀνελευθέριοςの形を採る。
- (5) 1192a7は、一部の写本 (C^c, P^b) がτίς οὖν ἐστίν; ὁを欠いている。……

第四章 (第二章)

- (6) 1192a19のοὐτεは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) 通り、οὐδὲと読む。

第五章 (第二章)

- (4) 1192a23の最初のτῶνは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) により、読まない。
- (5) この最後の部分は幾つかの異読があり、しかもどの読みも前の部分との斉合性がもう一つスッカリしない感じが残るが、ここでは、1192a24のκαὶ μάλλον δὲ δὴについて、μάλλον δὲはSusemihlの提案によりμάλλον γεと読み、δὴは幾つかの写本 (C^c, L, K^b) によりδεῖと読んで、全体として、καὶ μάλλον γε δεῖと読んでみた。……
- (6) 1192a31-32 — ἀξιούσιν ἢ προσήκον αὐτοῖς, μικρόψυχοι — の異読 (C^c, P^b) を採り、ἀξιούσι, προσηκόντων αὐτοῖς μειζόνων, μικρόψυχοιと読めば、「彼らにはより大きなものどもが相応しいのに、自分達はより小さなものに値すると考える人々は、卑屈」というほどの意味になろう。

第六章 (第二章)

- (8) 1192b10のδαπανᾷは、幾つかの写本 (L, K^b, B) により、δέον εἶναιと読む。

第七章 (第二章)

- (5) 1192b28のμέσοςは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, B) により、μεσότηςと読む。

第二九 (第三〇章) 章

- (6) 1193a7のτιςは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, B) により、削除する。

第三〇 (第三一章) 章

- (5) 1193a16のαὐ[τὸς]は、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) の通り、αὐτὸςと読む。

第三一 (三二章) 章

- (4) 1193a22のὄντωνは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、προσόντωνと読む。

第三二 (第三三章) 章

- (4) 1193a29のδὴは、一部の写本 (C^c, D) により、δὲと読む。

第三三章 (第三四章)

- (3) 1193b14の二番目と三番目の冠詞ὁは、幾つかの写本 (A, L, K^b, B) により、削除する。……
- (7) 1193b34の二番目のἐν (ἐν)は、幾つかの写本 (C^c, P^b, K^b, V) により、削除する。
- (11) 1194a16のτὴν πολιτείανは、一部の写本 (C^c, P^b) により、τὰς πολιτείαςと読む。
- (12) 1194a22のταῦτα πάνταは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A) により、πάντα ταῦταの語順で読む。
- (13) 1194a24のτούτωは一部の写本 (A, L) によりτοῦτοと読み、b25のσυνέχεινはσυνέχειと読む。
- (18) 1194a33のδίκαιοςは、幾つかの写本 (A, L, Rav.) により、δίκαιονと読む。
- (22) 1194b9のπολιταίは、幾つかの写本 (C^c, A, K^b, V) により、πολιτικοίと読む。
- (24) 1194b13のὁは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、読まない。
- (25) 1194b15-16のἀπ' αὐτοῦについては、ἀπ'は諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) によりὕπ'と読み、αὐτοῦは幾つかの写本 (P^{b1}, A, L, K^b, V) によりαὐτῆςと読む。
- (29) 幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、1194b28のἡの前にκαὶを読む。
- (34) 1195a1のμεταβάλλειは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、μεταβάλλοιと読む。
- (42) 1195a19のἐνεκαは、一部の写本 (C^c, P^b) により、ἐνεκενの形で読む。
- (43) 1195a19のτούτων εἰδώςは、一部の写本 (C^c, P^b) により、εἰδὼς τούτωνの語順で読む。
- (44) 1195a21のἀποκτείνειν (現在不定法) は、幾つ

かの写本 (C^c, P^b, A, V) により、ἀποκτενεῖν (未来不定法) と読む。……

- (45) 1195a22の οὐθὲν^aは、一部の写本 (A, L) により、οὐθὲν と読み、副詞的に解する。……
- (49) 1195a33の πίνειν^aは、幾つかの写本 (A, L, K^b, V) により、πιεῖν と読む。
- (50) 1195a34の καὶ^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, K^b, V) により、削除する。
- (58) 1195b15の ἡ ἄλλο τι^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἡ τι ἄλλο の語順で読む。
- (59) 1195b17の εἰ δὲ μὴ ἀδικεῖται, οὐδὲ ἐκὼν ἄρα^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, V) により、εἰ δὲ μὴ, ἀδικεῖται と読む。底本が採用する写本 (K^b) の読みを採れば、「ところが、もし不正行為をされてはいないのならば、それゆえ本意から〔不正行為をされている〕ではないことになるからである」というような意味になる。……
- (60) 1195b25の τοῖς τοιοῦτοις λόγοις^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、τοὺς τοιοῦτους λόγους と読む。
- (62) 1195b26の αὐτὸν^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἐαυτὸν と読む。
- (63) 1195b27の βλάπτει^aは、一部の写本 (C^c, P^b) により、βλάπτει δ' と読む。また、βλάπτειから次行の εἰδώς^aまでは、括弧に入れる。
- (65) 1195b29の κωλύσει^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、κωλύει と読む。
- (67) 1195b31の γε^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、削除する。
- (69) 1195b36の αὐτὸν^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, K^b, V) により、αὐτὸς と読む。
- (70) 1196a6の ταῦτα^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、τοιαῦτα と読む。
- (73) 1196a28の ἐστι^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、削除する。
- (74) 1196a29の δὲ^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、γὰρ と読む。

第三四章 (第三五章)

- (5) 1196b18-19の ἔτερά ἐστιν ἀλλήλων^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἔτερα ἀλλήλων ἐστιν の語順で読む。
- (6) 1196b23の ἐπεὶ δὴ^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἐπεὶ δ' と読む。
- (7) 1196b24は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、εἶναι の後に δεῖ と読む。

- (20) 1197a26の αὐτὴ^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^{b2}, V) により、αὐτή と読む。
- (21) 1197a29の ταῦτά^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、ταῦτα と読む。
- (24) 1197a37の ἄλλο τι (「何か別のもの」) は、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、ἄλληλα と読む。
- (25) 1197a37の τὸ^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、τῷ と読む。
- (26) 1197b3の διὰ τοῦτο^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により διὰ τούτων と読む。
- (39) 1197b34の περὶ^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、ὕπερ と読む。
- (42) 1198a1の εἰσὶ^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, V) により、ἔστι と読む。
- (44) 1198a8の οὐδ' αὖ^a ὅ^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ὁ δ' αὖ と読む。
- (49) 1198a15の οὗτοι^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, K^b, V) により、οὕτως と読む。
- (54) 1198a25の καὶ^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, B) により、削除する。
- (56) 1198a29の αὐτὴ^aは、一部の写本 (A, L) により、αὐτή と読む。
- (58) 1198b6の ὅπως γὰρ αὕτη προστάξει^aは、一部の写本 (A, L) により、ὅπως γὰρ ἂν αὕτη προστάξη と読む。
- (59) 1198b7の οἱ^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、οἱ と読む。
- (60) 1198b11の ἀλλά, φησὶν, αὕτη^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἀλλά φησὶν ὅτι αὕτη と読む。

第二卷

第一章

- (3) 1198b29の ἐβούλετο^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἠβούλετο と読む。

第二章

- (4) 1199a1は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, K^b) により、ἄνευ の後に τῆς を補う。
- (5) 1199a2の δὴ^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἤδη と読む。また、καὶ^aは、幾つかの写本 (C^c, P^b, K^b, V) により、削除しない。

第三章

- (7) 1199b31の οὐκ^aは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により削除し、文末は疑問文ではなく平叙文で読む。

- (8) 1199b33-34のτὸ σῶμαは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、τῷ σώματιと読む。
- (16)。なお、a19のτῆςは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, K^b) により、削除する。
- (17) 1200a22のγὰρは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、δεのままで読む。
- (18) 1200a26のπαραγενομένοιςは、一部の写本 (A, L) により、παραγινομένοιςと読む。
- (19) 1200a27のπαραγενομένηςは、一部の写本 (A, L) により、παραγινομένηςと読む。
- (20) 1200a29のδὴ ἡは、幾つかの写本 (A, L, K^b) により、δὴと読み、二番目のἡは、幾つかの写本 (A, L, K^b, V) により、削除する。

第四章

- (1) 1200a35のμὲνは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、μὲν οὖνと読む。

第五章

- (2) 1200b14のβελτίωνは、幾つかの写本 (C^c, P^b, L, V) により、βέλτιονと読む。

第六章

- (2) 1200b34のοὐκ ἂν δόξειεν. ἄτοπον γὰρは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἂν δόξειεν ἄτοπονと読む。
- (6) 1201a8のσυμβαίνειν ἐποιοῦνは、幾つかの写本 (P^{b1}, K^b, V) により、συμβαίνεινと読む。
- (9) 1201a14-16の箇所は、写本上も意味上も問題が多い。ここでは取りあえず、1201a14のμήは削除せず、a15のὁは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、οὐと読んでおく。.....
- (17) 1201a33のἡγαγενは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, K^b) により、ἦγενと読む。
- (22) 1201b7のδόξης ἐχούσης τὸについて、δόξηςは幾つかの写本 (C^c, P^b, A, K^b, V) により δόξαςと、ἐχούσηςは幾つかの写本 (L, K^b, V) により ἔχουσιと、τὸは幾つかの写本 (A, L, K^b, V) により τῷと読む。すなわち、全体としては、δόξας ἔχουσι τῷと読む。.....
- (26) 1201b30で否定辞οὐを読むのかどうかについて、写本は分かれている。元々否定辞を読んでいる写本はL写本とV写本のみで、P^b, A, K^bの各写本は後からの修正で否定辞を追加している。それ故、C^c, P^b, A¹, K^{b1}の各写本は、否定辞を読んでいないことになる。.....

- (27) 1202a4-5は、内容上、先行する部分との重複が見られ、また、一部の写本 (C^c, P^b) は、「だが酔いが取り去られると再び同じ人物である」の一文を読まないが、底本のまま訳出した。
- (33) 1202a20は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A) により、τινεςを読まず、οἱは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、οἱと読む。
- (38) 1202b5のψεκτὰ εἶναι δεῖは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、δεήσει ψεκτὰ εἶναιと読む。
- (44) 1203a4のἔχεινは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、ἔχειと読む。また、a3のσυμφορώταταの後のコンマをピリオドに変える。
- (46) 1203a6のεὐιατότεροςは、一写本 (P^b) の訂正に従い、ἀνιατότεροςと読む。
- (47) 1203a7のἴσως οὐχは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, V) により、読まない。
- (54) 1203a25のἔστινは、一部の写本 (C^c, P^b) により、ἐνεστινと読む。
- (56) 1203a30は、一部の写本 (C^c, P^b) により、εἶδηの後にοἶονを補う。
- (57) 1203a34のμετὰ τοῦ λόγουは、幾つかの写本 (C^c, A, L) により、μετὰ λόγουと読む。
- (65) 1203b22のἡ οἴός τεは、幾つかの写本 (C^c, A, L, K^b) により、ἡ οἴός γεと読む。
- (67) 1203b28のοὐτεは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、οὐδὲと読む。
- (68) 1203b30-31のγενομένωνは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、γινομένωνと読む。

第七章

- (11) 1204b18のμὲνは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, V²) により、読まない。
- (13) 1204b22のοὐκは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、読まない。
- (16) 1204b27は、一部の写本 (K^b, V) により、τῆς ψυχῆςの後にἦを補う。
- (18) 1204b29の二番目のτὸは、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、削除する。
- (27) 1205a16のαίは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, V) により、読まない。
- (32) 1205a22-23のἐν Ἰρεῖは、一写本 (L) および Sylburgの示唆により冠詞ὃを補うと共に、一部の写本 (C^c, P^b) 並びに Bergkの示唆により Ἰλεῖを Νηλεῖと読むことによって、ὃ ἐν Νηλεῖと読む。
- (34) 1205a25のδόξαιενは、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、δόξειενと読む。

- (40) 1205b1のἐστίνは、一部の写本(C^c, P^b)により、読まない。
- (41) 1205b3の最初のκαὶは、一部の写本(C^c, P^b)により、読まない。
- (44) 1205b19のμὴは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、οὐと読む。
- (54) 1206a11のτὰは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、読まない。
- (57) 1206a21のἦは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, V)により、καὶと読む。
- (58) Dirlmeier 410は、1206a25のἀπ' αὐτῆςに注目して、この文の主語は徳と解しているが、その語句はἀπ' αὐτοῦ, sc. τοῦ πράττειν (1206a10)を意味しうと付言している。
- (62) 1206a31のἄλλοςは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, V)により、ἄλλωςと読む。
- (69) 1206b23は、τούτοιςの後にコンマを打ち、幾つかの写本(C^c, P^b, L)により τοῦは読まない。
- (70) 1206b24のὑστεροςは、一部の写本(L, V)により、ὑστερονと読む。

第八章

- (3) 1206b35のτίςは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、τίと読む。
- (8) 1207a6のθεῶνは、幾つかのギリシア語写本(C^c, P^b, A, L)およびラテン語訳(Bf⁶)により、θεοῦと読む。
- (12) 1207a15は、幾つかの写本(C^c, P^b, L, K^b)により、εὐνοιαの後にἦを補う。

第九章

- (1) 1207b21のτὰは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L, V)により、読まない。
- (2) 1207b20は、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, V)により、εἶηの後にκαὶを読む。
- (6) 1207b30のοἶονは、一部の写本(C^c, P^b)により、削除しない。

第一〇章

- (3) 1208a19のἐνεργεῖνは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、ἐπιτελεῖνと読む。
- (5) 1208a24のαἰσθάνομαιは、Jaeger 442の示唆により、αἰσθανώμαιと読む。
- (7) 1208a27のφησίは、幾つかの写本(P^{b2}, A, K^b, V)

により、φήσειと読む。

- (11) 1208a39のπαραδιδόναιは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L, K^b)により、παραδοῦναιと読む。

第十一章

- (3) 1208b10の二つのὅμοιονは、幾つかの写本(C^c, P^b, L, V)により、ὅμοιονというアクセントで読む。
- (4) 1208b11とb13のκεραμῖδοςは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, V)により、κεραμῖδοςというアクセントで読む。
- (5) 1208b13のκεραμῖδιは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L, V)により、κεραμῖδιというアクセントで読む。
- (6) なお、1208b17は、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、πέδονの後にἦを補う。
- (12) 1208b29のοὔτεは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, V)により、οὐδὲと読む。
- (18) 1208b38の二番目のκαὶは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L, K^b)により、削除する。
- (19) 1209a2のαὐτῶは、幾つかの写本(A, K^b, V)により、αὐτῶと読む。
- (21) 1209a7のτὸ ἥδὺ εἶναι καὶ τὸ συμφέρονは、幾つかの写本(L, K^{b1}, V²)により、τὸ ἥδεῖ εἶναι καὶ τὸ συμφέροντιと読む。.....
- (24) 1209a16は、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、φιλητέονの後にἐστινを補う。
- (27) 1209a35のκατ'は、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、削除しない。
- (29) 1209a38の最初のὁは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L, V)により、読まない。
- (30) 1209b1のὁは、幾つかの写本(C^c, P^b, A, L)により、読まない。
- (32) 1209b8のφίλοιは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, V)により、φίλοςと読む。
- (34) 1209b16は、ἀλλὰをEllebodiusの推測により ἀλλ' ἅμαと読み、συμμεταπίπτειは、諸写本(C^c, P^b, A, L, K^b, V)により、μεταπίπτειと読む。
- (42) 1210a13は、幾つかの写本(C^c, P^b, A, K^b, V)により、καὶの後にὁを補う。.....
- (43) 1210a14は、幾つかの写本(C^c, P^b, L, V)により、πέδονの後にἦを補う。
- (44) 1210a21のἐὰνは、一部の写本(C^c, P^b)により、ἂνと読む。
- (57) 1210b33は、幾つかの写本(P^b, A)により、

⁶ de bona fortuna – communis translatio

πότερον δ' ἔστιν αὐτοφιλία, καὶ πρὸς αὐτὸν φιλία
..... と読む。

- (60) 1210b39のαὐτῶ は、幾つかの写本 (C^c, A, L, K^b, V) により、αὐτῶ と読み、1211a1のαὐτὸν は、幾つかの写本 (C^c, P^{b2}, B) により、αὐτὸν と読む。
- (61) 1211a3のγὰρ は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, V²) により、δε と読む。
- (65) 1211a22のβουλόμεθα は、幾つかの写本 (A, L, V) により、βουλοίμεθα と読み、それに連動して、μάλισταの後にἀνを補う。
- (67) 1211a24のἔστι は、幾つかの写本 (A, K^b, V) により、読まない。また、一部 (A, L) の写本により、φιλίαの前にήを補う。
- (71) 1211b15の二つ目のἴσον は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、ἴσος と読む。

第一二章

- (1) 1211b24のκαὶ は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、削除しない。
- (2) 1211b36のεὐνοὶ は、諸写本 (C^c, P^b, A, L, K^b, V) により、εὐνοοὶ と読む。
- (5) 1212a4のεὐνοὶ は、一部の写本 (C^c, P^b) により、εὐνοοὶ と読む。
- (7) 1212a7のφιλίας ἢ εὐνοια は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L, K^b) により、ἢ εὐνοια φιλίαςの語順で読む。

第一三章

- (2) 1212a35のαὐτοῖς δεῖν は、一部の写本 (C^c, P^b) により、δεῖν αὐτοῖς と読む 。

第一六章

- (1) 1213b9-10のοὐτ' ἐπὶ τῶν ἄλλων ὁμοίως ἀπάντων. は、一写本 (C^c) に従い、οὐτ' ἐπὶ τῶν ἄλλων, ὁμοίως καὶ ἐπὶ πάντων. と読む。

第一七章

- (3) 1213b27のδη は、幾つかの写本 (C^c, P^b, A, L) により、οὐν と読む⁷。

⁷ この他に、拙訳印刷の途中で編集上の理由によりやむなく削除されたものとして、旧版アリストテレス全集第14巻の茂手木元蔵氏による『大道德学』の翻訳においては、以下の三箇所が訳し落とされていることの指摘がある。

① 第一巻第二十三章 (第二十四章) 1192a7-8: 「それではそれは誰のことか。そうすべきものへ、そうすべきだけのものを、そうすべき時に支出するひとがそれである。」

② 第二巻第六章 1201a26: 「なぜなら、立派なことを行為する限りで、賞賛に値するから。」

③ 同巻同章 1202b27-28: 「それゆえより一層非難に値する。」

A Supplement to a new Japanese Translation of the supposedly
Aristotelian *Magna Moralia*

Tatsumi NIIJIMA

Abstract

This article is a supplement to my new Japanese translation of the supposedly Aristotelian *Magna Moralia*. It mainly consists of Greek manuscript data, when readings different from those in Susemihl's Teubner edition are adopted.